

# アメリカ黒人における キリスト教体験をめぐって

斎藤 忠利

歴史的に言って地上のキリスト教会には、悔い改めるべきところが少なくないが、アメリカのキリスト教会は、それがキリストの教会であろうとする限り、いわゆる「人種問題」ないしは「黒人問題」に関して徹底的な悔い改めを必要としている。そもそもアメリカのキリスト教会は、アメリカ大陸におけるイギリス植民地に奴隷制度が導入されるにあたって、この制度を是認もしくは黙認し、黒人奴隷の使用を聖書の立場から正当化しようとさえした前科がある。その際、しばしば援用された聖書の一節は、ノアの三人の息子の一人で、カナン(1)の父ハムに関する以下の記事である。

さてノアは農夫となり、ぶどう畑をつくり始めたが、彼はぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。カナン(1)の父ハムは父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。セムとヤベテとは着物を取って、肩にかけ、うしろ向きに歩み寄って、父の裸をおおい、顔をそむけて父の裸を見なかった。やがてノアは酔いがさめて、末の子が彼にしたことを知ったとき、彼は言った、

「カナンはのろわれよ。

彼はしもべのしもべとなって、

その兄弟たちに仕える」(創世記 9: 20-25)

つまり、ハムは、泥酔して眠り込んだ父ノアの裸体を見て、それを兄弟たちに告げ口をしたために父ノアの怒りを招き、ハムの子孫は呪われて、その兄弟たちに奴隷として仕える定めとなった、と言うのであるが、その名「ハム」には、ヘブル語として「暑い」もしくは「黒い」という含意があるらしく、また、「ハムの子孫はクシ、ミツライム、ブテ、カナンであった」(創世記 10: 6)が、「クシ」はエチオピア、「ミツライム」はエジプトのことであるところから、ハムは黒人種の先祖であるとされるに至り、黒人種が奴隷として他の人種に仕えることは聖書の神が定めた摂理に他ならな

いと説かれたのである。

また、聖パウロが、一見、奴隷の解放には消極的であって、<sup>(4)</sup>その牧会書簡の中に「くびきの下にある奴隷はすべて、自分の主人を、真に尊敬すべき者として仰ぐべきである」(1 テモテ 6: 1) と書き、さらに「奴隷には、万事につけその主人に服従して、喜ばれるようになり、反抗をせず、盗みをせず、どこまでも心をこめた真実を示すようにと、勧めなさい」(テトス 2: 9-10) と勧告している言葉をとらえて、アメリカのキリスト教会は、奴隷制度を支え、これに奉仕するイデオログとして、この言葉を講壇から語り続けた責めを負っている。<sup>(5)</sup>

〔もとよりパウロを、本来、革命的であったキリストの福音を体制内化した宗教に変質せしめたことで批判することは可能であるが、パウロも言うように、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(ガラテヤ 2: 20) と言いきれるキリスト教信仰の極致に立てば、「そこには、もはやギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隷、自由人の差別はない。」(コロサイ 3: 11) 従って、このようなキリスト教信仰に徹しきった人間にとっては、あくまでも「キリストがすべて」であって、地上の生活において自分が奴隷であるか否かは、枝葉末節、全くどうでもよい問題ということになる。しかし、このような超越的な立場が可能であるとして、次に問題となるのは、こうした超越的な信仰の立場が結果的に現実世界の不正もしくは矛盾を容認しかねない点である。キリスト教信仰の問題点として真に問われなければならないのは、ここにあるのではなからうか。〕

以上を要するに、アメリカ黒人がアメリカのキリスト教会を通じて知ることになったキリスト教は、不幸な歴史の偶然によって、一義的には常に、奴隷主であった白人種の宗教であり、アメリカ社会における白人優位の原則を神の名において正当化しようとする抑圧と懐柔の手段であった。それにも拘わらず、アメリカ黒人の間に「キリスト教化」がすすんでいることは周知の事実である。アメリカ黒人は、どのようなものとしてキリスト教を受けとめたのであろうか。小論は、アメリカ黒人におけるキリスト教体験の内実とその意味を探ろうとする、ささやかな試みである。

いささか意外な感がなくもないが、アメリカ大陸におけるイギリス植民地の奴隷主たちは、当初、黒人奴隷の間にキリスト教を布教することに必ずしも積極的ではなかつた。<sup>(6)</sup>それは、ひとつには、新約聖書に見られる「キリスト者の自由」の理念に照ら

して、バプテスマをさずけた黒人奴隸をそのまま奴隸として使用することがためらわれた、という事情によっている。ところが、英国教会の監督が植民地の奴隸主たちに「キリスト教と福音の受容とは、市民的所有ないし市民的諸関係に帰属する、いかなる義務行為にも、いささかの変更をも加えるものではない」ことを保証し、たとえば<sup>(7)</sup> 1667年にヴァージニア植民地議会が「バプテスマは黒人奴隸に自由を与えるものではない」とする法案を通過させるに及んで、黒人奴隸に対するキリスト教の布教は、<sup>(8)</sup> いわば解禁となった。[もっとも、日曜日毎に奴隸主が礼拝に出席する際、黒人奴隸が奴隸主のお供をするということは早くからあったらしく、礼拝中、黒人奴隸たちは教会堂の中二階のバルコニーに押し込められて、礼拝の見物をしていた。このバルコニーは“nigger heaven”と呼ばれたが、これが後に劇場などの「天井桟敷」を意味する蔑称となっていることは興味深い。]

とは言え、組織的なキリスト教の布教は、18世紀に入ってからで、1701年にその認可を受けた「外国福音伝道協会」(The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts)を先頭に、モラビア派、長老派、クエーカー、カトリックなどの各派がきそって黒人奴隸の間に宣教を試みたが、その成果は見るべきものがなく、19世紀の初頭、アメリカ黒人100人中、キリスト教信徒はわずか4ないし5人(黒人総数100万人のうち、黒人信徒は5万人)、しかも黒人信徒の大半は子供たちであった<sup>(10)</sup>と言われる。

このような事実をとらえて、アメリカ黒人が異教的な迷信に縛られた「項の強き民」(“a stiff-necked people”) (出エジプト 33: 3)であったとするのは当たらない。むしろアメリカ黒人は、アメリカのキリスト教会が——クエーカーを唯一の例外として——奴隸制度を容認しつつ黒人奴隸に「自由の福音」を説く、その欺瞞性を直感的に感じとり、奴隸主に従順であれと教える、うさんくさいキリスト教に反撥した、と見るべきであろう。また、白人説教師の言行不一致、形式主義に墮した礼拝の無気力さと白々しさが、アメリカ黒人をキリスト教会から遠ざける要因となったことも否定できまい。

しかしながらその一方で、E. F. Frazierのいわゆる「見えない制度」(“invisible institution”)<sup>(11)</sup>としての「黒人教会」が黒人奴隸たちの間に生まれていた。この「黒人教会」は明らかに、黒人奴隸たちが聖書の世界を知ることによって生み出されたものではあるが、果してこれをキリスト教会と呼び得るものかどうか、またこの「黒人教会」を指導した黒人奴隸たちが、アフリカ大陸に起源をもつブーズ教(voodooism)の「まじない師」(medicine men)であったかどうかは、大きく議論のわかれるとこ

(12) ろである。そこで、それらの論点に関しては、今後の学問的検証を待たねばならないが、少なくとも歴史的事実として確認しておいてよいことは、この「黒人教会」が、宗教的集会の名目のもとに、一時的にもせよ黒人奴隷たちがきびしい奴隷主の監視を逃れ、失われた連帯感を回復し、束の間の自由を享受し得る場所となり、また、後述するように、しばしば奴隷暴動の温床もしくは拠点となった事実である。そのことは早くも 1715 年に、ノース・キャロライナ植民地議会が「いかなる建物であれ礼拝用の会堂と称して黒人にその建築を許した奴隷主には、50 ポンドの罰金刑を課する」旨の法案を通過させ、1723 年にはメアリランド植民地議会が黒人たちだけの宗教的集会を制限する議決を行ない、また、1770 年までにジョージア植民地が黒人奴隷の集会を禁じて、この禁令を破った者は「25 回の鞭打ちの刑に処する」とした、一連の立法行為によって裏書きされる<sup>(13)</sup>ところである。

さて、アメリカ黒人が聖書の世界に深く接するようになったとき、何にもまして彼らの心を捉えたものは、その昔、ヤーヴェの神がモーセを起てて、エジプトの地に奴隷としてつながれていたイスラエル民族を解放した「出エジプト」の壮挙であった。つまり、アメリカ黒人は、奴隷としての自己の境遇を古代イスラエル民族の運命に重ね合わせ、聖書の世界に自己の隷属と解放のドラマを読み込むことによって、聖書の神に奴隷解放の希望をつなごうとした、とすることができる。このようなアメリカ黒人の聖書理解は、数々の黒人霊歌——わけても有名な「モーセよ、くだり行け」(“Go Down Moses”) など——に窺い知れるところであるが、このことは、アメリカ社会において一義的には白人種の支配の手段であったキリスト教を、アメリカ黒人が抵抗の武器として捉え直したということであって、聖書の世界に通暁した黒人奴隷が奴隷暴動の首謀者となっていることは故なしとしない。

奴隷制度下において奴隷暴動を指揮した人物として記憶されるのは、ゲイブリエル・プロッサー (Gabriel Prosser)、デンマーク・ヴィーゼー (Denmark Vesey)、ナット・ターナー (Nat Turner) などであるが、これらの黒人たちは、いずれも、聖書を熟読して、自らが奴隷解放の大義のために聖別された神の器である、とする一種誇大妄想的な召命感を抱くに至っている。1800 年に奴隷蜂起を図ったゲイブリエル・プロッサーは、ペリシテびとの圧制に苦しんだイスラエル民族解放の戦いに、白人支配下のアメリカ黒人の解放闘争のモデルを求め、自らをイスラエルの士師サムソンに擬して、「黒いサムソン」をもって任じ、サムソンに関する聖書の記事 (たとえば士師記 15: 14-20) に黒人国家樹立の夢を託そうとしている。ゲイブリエルの奴隷蜂起の企ては、その時代的な背景を考えるならば、ジェファソニアン・デモクラシー

の理念、ハイチにおける黒人革命の成功、フランス革命における平等の観念、奴隷制反対運動の気運などの影響によるところが少なくなかったが、その指導者が聖書を通じて与えられた幻に動かされたところに起爆剤はあった。なお、この反乱計画は、奴隷仲間の密告によって、結局、未遂に終わりはしたものの、ゲイブリエル自身の証言によれば1万人の黒人を動員する手筈がととのった、組織的奴隷暴動のはしりとなった。<sup>(14)</sup>

デンマーク・ヴィーゼーの暴動も事前に発覚して不発に終わったが、1800年に自由を買い取ったヴィーゼーは、大工を職業とし、ゲイブリエル・プロッサーと同様、聖書に深く通じ、旧約の預言書（とりわけ、ゼカリヤ書）やエリコの戦いに関する記事（ヨシュア記 6: 1-21）に独特の解釈をほどこし、そこから黒人解放の理論と戦術をひき出して黒人同胞に呼びかけ、1822年の7月14日（のちに6月16日に変更）を一斉蜂起の日と定めて3千ないし9千人の黒人を動員する暴動を計画している。この場合も、暴動の計画は「黒人教会」の集会で密かに練られており、黒人奴隷たちは、日没から翌朝の日の出まで黒人だけの宗教的な集会を禁じた1800年のサウス・キャロライナの州法——この州法は、のちに緩和されたが——の禁令を破って謀議に参画したものと見られる。<sup>(15)</sup>

Ante-bellum のアメリカ南部白人社会に多大の衝撃を与えた奴隷暴動は、なんと言ってもナット・ターナーの反乱（1831年）である。ナット・ターナーは、奇しくも1800年、ゲイブリエル・プロッサーが奴隷蜂起を企てたその年に、ヴァージニア州サウサンプトン郡の農園主ベンジャミン・ターナーの奴隷として生まれている。彼は、処刑される直前、トマス・R・グレイ（Thomas R. Gray）なる人物の質問に答える形で、奴隷暴動を企画・実行するに至った経緯を語る「ナット・ターナーの告白」<sup>(16)</sup>（“The Confessions of Nat Turner”）を残しているが、それによると、幼い頃から生前に起こったことを言い当てるというような超能力を発揮して、将来、預言者になる人間だと見られていた。また、信仰の厚い主人などの感化もあって、ナット・ターナーは宗教心を養われ、成人してからは、「まず神の国を求めよ」（マタイ 6: 33）という聖霊の啓示を受け、さらに白い霊と黒い霊が相戦い、太陽も光を失い、雷鳴が轟き、血が滝のように流れ落ちる、という幻を目撃し、とうもろこし畑に血の雨が降っているのを発見するに及んで、審きの日が近いことを知り、黒人奴隷の敵に他ならない白人たちを殺戮することが神から示された使命であると信じて、天からのしるし——日蝕——を合図に腹心の奴隷仲間と相謀って行動に踏みきった、と告白している。

総計 55 人に及ぶ白人たちを無差別に殺害した奴隷暴動の主謀者ナット・ターナー

を、血に飢えた狂信的殺人鬼と見るむきもないではないが、個人的には何の恨みもない白人たちを次々と殺した手口を淡々と語っていくナット・ターナーの冷静さは、奴隷解放をもって神の意志と考え、神の審判を代行していると信ずる、恐ろしいばかりの使命感があればこそであろう。彼は、白人の教会ではバプテスマを授けさせて貰えなかったために、多くの人々から罵倒される中で水に身を浸し、聖霊のバプテスマを受けた、と述べているが、<sup>(17)</sup>このことから判断して、黒人奴隷の間でバプテスト派系の「奨励者」<sup>(18)</sup> (“exhorter”) の役をつとめていたものと推定される。従って、ナット・ターナーの反乱を、彼の理解した「キリスト教」ぬきに語ることはできない。

ところで、制度化された黒人教会の出現は、大方の論者がひとしく主張しているように、1816年、リチャード・アレン (Richard Allen) が「アフリカ・メソヂスト監督派教会」<sup>(19)</sup> (“the African Methodist Episcopal Church”) を創設した時に始まり、と見てよい。リチャード・アレンは1760年に奴隷としてフィラデルフィアで生まれたが、早い頃からメソヂスト派の説教師の感化を受け、1777年にキリスト教に入信、また同年に自由を買取って自由黒人となった。その後、彼はいくつかの職業に従事したが、1780年に説教師となり、その才能を認められて白人の牧師たちと伝道旅行に出るようになった。ついで彼は1786年に招かれて、フィラデルフィアの聖ジョージ・メソヂスト監督教会で説教をすることになるが、翌1787年、礼拝中、誤って黒人用の座席に着席しなかったために、祈禱をささげているところを引きずり出され、このようなキリスト教会内の人種差別の結果、かねてから黒人教会の独立の必要性を痛感していたアレンは、同志と共にメソヂスト派の白人信徒と袂を分かち、最初、キリスト教的なクラブ「自由アフリカ協会」<sup>(20)</sup> (“the Free African Society”) を結成。その後、内部分裂その他の紆余曲折を経て、各地に生まれた「自由アフリカ協会」を母胎とする諸教会の連合体「アフリカ・メソヂスト監督派教会」の誕生を見るに至るのである。

このように制度化された黒人教会は、白人中心のキリスト教会に差別的な条件のもとで組み込まれていた数少ない自由黒人が、自分たちだけの教会をもとうとして独立したものに過ぎなかったために、伝統的な白人化したキリスト教を克服するに足る斬新な神学も教会観も生み出すことはできなかった。そのことは、上述のリチャード・アレンの説教にもうかがわれるところであって、<sup>(20)</sup>その信仰は、罪のうちに死ぬほかならない人間がキリストの十字架の死による贖いの業<sup>わざ</sup>によって救われることを信ずる、極めてオーソドックスなキリスト教信仰でありながら、魂とその救いを強調することが返って現実の奴隷制度に対する批判を手ぬるいものとさせ、奴隷制度の軛につながれて

いる黒人同胞にむかって、「奴隷主たちを愛し、神に依り頼め」、「従順な奴隷となり、奴隷主たちに思いやりの心をもつことが、奴隷解放につながる」と説き、「神の愛が心に宿っていることがなによりも貴く、また苦しい生活の中で慰めとなり、この地上の短い一生は来世に備えるためのものであって、苦しい生涯を終えることになっても、神の備え給うた自由を受ける身となる」と教えることになったのである。

もちろん、制度化された黒人教会の側に、聖書の立場から奴隷制度を悪とする認識はあって、黒人種が奴隷となって白人種に仕えることが神の定めであったとする聖書解釈に聖書の言葉をもって反論するために、詩篇 68: 31 や使徒行伝 17: 24-26 などの聖句が、黒人教会の講壇から説かれ続けた。また、北部の黒人教会は、しばしば逃亡奴隷の逃走を助ける地下鉄道の「駅」となったことも記憶される。しかし、全体として、制度化された黒人教会は、来世を説くことによって現世を忘れさせる、阿片としての宗教に墮する危険につきまわっていた。

そのような意味において、1863 年の奴隷解放宣言の結果、前述した「見えない制度」としての「黒人教会」が制度化された黒人教会と合流することになったのは、アメリカ黒人にとって必ずしも喜ぶべきことであったとはいいがたい。なるほど、これ以後の黒人教会は、アメリカのキリスト教会の各派の単なる一分派であるというに留まらず、アメリカ黒人の全生活を包み込み、これに統一を与える組織として、礼拝の場である以上に、経済的な相互扶助のセンター、クラブ、社交場、教育、ときに娯楽・スポーツ施設の機能を果たしてきた。また、いわゆる南部の「再建期」以後、アメリカ黒人が一度は進出することもできた政界から締め出されてからは、教会の運営、役員の選出など、教会政治に参画することで、黒人教会はアメリカ黒人の政治的訓練の場となり、さらに奴隷制度の後遺症として人種差別がアメリカ社会に定着するようになる、黒人教会はアメリカ黒人が逃げ込むことのできる恰好の避難所となった。そして、このような黒人教会の機能は、第一次世界大戦を契機として、南部の農村地帯から低く見積もっても 50 万以上もの黒人が北部の工業都市に集中的に移り住んだ、いわゆる「大移住」以後、都市生活者となったアメリカ黒人には、ますます必要とされ、北部の大都市の黒人地区では人口比から見て多すぎるとさえ言われる黒人教会——それも主として、財政的な理由から会堂をもつことができず、商店の一部を利用した「店頭教会」(“storefront church”)<sup>(22)</sup>——が軒をならべる盛況を呈した。

だが、こうした黒人教会の社会的機能がアメリカ黒人の置かれてきた社会的状況のもとで、いかに必要とされたものであったにせよ、それは結局、アメリカ黒人の憤り、欲求不満、挫折感、敗北感、絶望感などを宗教的情熱という形で発散・解消させるだ

けに終わる可能性があり、アメリカ黒人に対する社会的抑圧と彼らの宗教的情熱とが比例関係をなし、しかもアメリカ黒人の宗教的情熱は社会的抑圧をはねのけるエネルギーたり得ない、という一種の悪循環に陥り易かった危険性は指摘しておかねばならない。現に残念ながら、近年の黒人教会は自己保存に汲々として、アメリカ黒人解放の原動力たり得なくなってきたており、とくに今世紀に入ってからアメリカ黒人の解放運動に教会ばなれ（“dechristianization”）の現象が目立つことは否定できない。<sup>(23)</sup>

そのような事態の中で、黒人教会のもつ革命的な戦闘力の健在ぶりを証してくれたのは、1955年の暮れから一年間にわたって行なわれたバス・ボイコット運動に関連して、カリスマ的指導力を発揮したマーティン・ルーサー・キング牧師（Rev. Martin Luther King）である。キング牧師については、すでに多くのことが語られているので、ここに贅言を要しないが、黒人教会の牧師ないしは説教師が召し出されて黒人大衆の先頭に立ち、その指導力をふるうというパタンは、奴隷制度下の「黒人教会」以来の伝統であり、<sup>(24)</sup>キング牧師の行動は、キリスト教信仰がどのような形でアメリカ黒人の市民運動に具体化され得るか、その一典型を示したものとして記憶されるであろう。周知のようにキング牧師は、キリストの山上の垂訓の精神を基盤とし、ヘンリ・デイヴィッド・ソーロー（Henry David Thoreau）、マハトマ・ガンディ（Mahatma Gandhi）と続く思想的な系譜につらなる「非暴力的抵抗」をもって、その行動形態としたが、「だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」（マタイ 5: 39）というキリストの言葉を、抑圧者の不義を増長させるのではなく、抑圧者を恥じ入らせ、その麻痺した良心を呼び醒ます勇氣ある行動へとキリスト者を促す倫理性のきびしさにおいて理解したところに、キング牧師の偉大な功績がある。

次に、話題は変わるが、アメリカ黒人におけるキリスト教体験の検討には不可欠な、アメリカ黒人によるキリスト教批判について瞥見しておきたい。文献の形で残されているもので、ごく初期の、しかも最も手きびしいキリスト教批判のひとつは、デイヴィッド・ウォーカーの「世界の有色市民への訴え」（“Appeal to the Coloured Citizens of the World”）（1829年）であろう。デイヴィッド・ウォーカーは、1785年、黒人奴隷を父に、自由黒人を母として、ノース・キャロライナに生まれたが、奴隷制度に対して激しい憤りを抱き、郷里を捨て、ボストンに住みつき、読み書きをおぼえ、衣料品をあきない、のちに最初の黒人新聞「自由ジャーナル」（*Freedom's Journal*）に関係するようになり、奴隷制反対の講演を精力的に行なっている。

ウォーカーの「訴え」は、ヴォルテールの『紳士の教義問答』（Voltaire, *Catéchisme de l'honnête homme*）<sup>(25)</sup>以来の最も痛烈なキリスト教批判と言われるが、ウォーカーは



無神論者ではなく、終生、ボストンのメソヂスト教会の忠実な会員であった。従って、彼が訴えたかったのは、アメリカ社会においてキリストの福音の真理が奴隷制度のためにいかに曲げられているか、ということであり、キリストの福音をその本来の姿にもどせ、と呼びかけたことになる。以下に、その一節を引用してみよう——

アメリカ人たちがとり行なっている宗教儀式ほどひどすぎる宗教のまがいものが他にあるか。まるでアメリカ人たちは、全能なる神にやれるだけのことをやってみろ、と挑むことにもみ専念しているかのようだ——奴らは、われわれとわれわれの子供たちを鎖でつなぎ、手枷をかけ、われわれを獣のように追いたて、それから正義の神の家に入り、われわれに対する極悪非道な奴らの残虐行為を神が手助けしてくれたと、神に感謝を捧げる。主なる神は、このような連中を放置して、みだりに神の聖なる御名を唱えるのを、これ以上許し給うであろうか。神は、この連中を、説教者その他の人間もろとも、押しとどめられるのではなからうか。おお、アメリカ人たちよ！ アメリカ人たちよ！ 神も照覧あれ——天使も照覧あれ——世人も照覧あれ、お前らの破滅は近い。悔い改めない限り、お前らの破滅は、またたく間に完遂されよう。<sup>(26)</sup>

また、19世紀における最大の黒人解放運動の闘士フレデリック・ダグラス(Frederick Douglass)も、早い頃から自分が黒人奴隷として生まれたことを神の摂理とすることに疑問を抱き、21歳のとき自由を求めて逃亡し、その後、自由を買い取って自由黒人となり、奴隷解放のために雄弁の才をもって活躍するが、その生涯に三度書き改めた自伝のひとつに次のように書き記して、アメリカのキリスト教会を弾劾している——

だが、この国の教会は、奴隷の受けている不当な扱いに無関心であるだけでなく、実はなんと抑圧者側に加担しているのだ。教会は、アメリカの奴隷制度の害となり、アメリカの奴隷狩り連中の盾になりおおせている。教会の最も雄弁な聖職者たちの中には、教会のまさしく光として立ちながら、厚顔無恥にも奴隷制度全体に宗教的・聖書的認可を与えているものが多い。彼らの教えるところによれば、人が奴隷とされることは、本来的に、あってよいことであり、奴隷主と奴隷の主従関係は神によって定められたところであり、逃亡奴隷をその奴隷主に送り返すことは、明らかに、主イエス・キリストの信奉者すべての義務である。こうして、この恐るべき濫神が、キリスト教と称して世人につかまされるのだ。

わたしとしては、不信仰こそ願わしい、と言いたい！ かの聖職者どもの説く福音にくらべれば、それよりましなものは何であっても！ 願わしい！ 彼らは、宗教の名そのものを暴虐と野蛮きわまりない残虐行為の手段と化し、現代にあって、トマス・ペイン、ヴォルテール、ボーリングブルックの無神論的著述が束になってかかってもできないほどに多くの無神論者を強化するのに役立っているのだ！——それは、抑圧者、人攫い、悪漢の宗教だ。それは、天来の「純粹・無垢な宗教」——「第一に純粹、つぎに温和で、願い求め易く、憐みと善き実に満ち、不公平もなく、偽善もない」宗教ではない。そうではなくて、貧者を捨てて富者を顧みる宗教。へりくだる者を抑えて心高ぶる者を押し上げる宗教。人類を圧制者と奴隷の二階級に分割する宗教だ。……それによって、神は人をかたより見る御方となり、神が人類の父であることは否定され、四海同胞の大真理は土埃の中で踏みしだかれることになるのだ。<sup>(27)</sup>

以上に見たアメリカ黒人のキリスト教批判は、キリスト教をアメリカの白人種の宗教として捉える限り、その激しい罪状告発に異論のあろうはずはない。だが、その批判には、アメリカにおいてキリスト教が奴隷主の宗教であったにも拘わらず、キリストの救いにあずかると信ずるアメリカ黒人の、いわば内部告発の苦渋というべきものが感じられない。結局、キリスト教は、アメリカ黒人にとって外在的な支配者の宗教でしかなかったということなのであろうか。アメリカ黒人は、最終的には、キリスト教を抑圧者の宗教として排斥するほかないのであろうか。ところがここに、キリスト教を捨てようにも捨てられなくなった（と信じてよい）アメリカ黒人のキリスト教批判がある。断わるまでもなく、ジェイムズ・ボールドウィンの『次は、火だ』（James Baldwin, *The Fire Next Time*）（1963年）である。ボールドウィンにおいては、どのようなものとしてキリスト教は理解されているのであろうか。その点を、このエッセイ集に即して検討することにしたい。

ボールドウィン自身の語るところによると、彼は14歳になった年の夏に「長びいた宗教的な危機」<sup>(28)</sup>（“a prolonged religious crisis”）を経験する。その言うところは要するに、キリスト教がたまたまアメリカの宗教であったために、キリスト教の神を信ずべき唯一の神として受け入れた、ということであるが、それがボールドウィンの苦悩の始まりであった。もとより、その苦悩は、白人種の宗教であったキリスト教を受け入れようとするアメリカ黒人すべてに共通するものではあるが、ボールドウィンの場合は、キリスト教の説教師であった継父の白眼視のもとに育ったという個人的な事

情もあってその苦悩は複雑である。ポールドウィンの入信の経緯をたどってみると、そこにはまず、思春期の少年が性の目覚めにともなう罪意識をかかえたまま、神の前に罪ある人間としての自覚を深めつつ進み出る、という信仰体験のバタンが認められるが、こうした極めてパーソナルな信仰体験も、キリスト教が果たしてきた歴史的役割を背景とする精神的・文化的コンテキストの中で生起するものであって、ポールドウィン個人における罪の自覚と再生のドラマは、「キリスト教的」アメリカ社会の中で汚れた者とされてきたアメリカ黒人の恥辱の歴史をポールドウィンに直視させると共に、アメリカ黒人がその恥辱の歴史の中に見捨てられたままであってはならない、とする主張へとポールドウィンを導いていく。しかし、とポールドウィンは考える。聖書の神が愛の神であり、その神を信ずる信仰によって神の子とされた者すべてを愛する御方であるとすれば、今日に至るまでアメリカ黒人が見捨てられたままなのは、なぜか。ポールドウィンは、婦人牧師の説教のあと、説教壇の前の床に倒れたまま一夜をすごして、「救いにあずかった」とされた夜のことを想起しながら、次のように書く――

わたしが実際に覚えているのは苦痛、筆舌につくしがたい苦痛だけだ。それはまるで、聞いてくれようとしないうちにむかって、わめいているかのようだった。もし天が、わたしの言うことを聞きとどけてくれず、愛が天から舞い降って、わたしを洗い、浄めてくれるということがあり得ないとすれば、完全な身の破滅こそ、わたしの宿命ではないか。そうなのだ。白人の国、アングロ・テュートン系人種の禁欲的な国に黒人として生まれることは、たしかに大変なこと、言葉に言いあらわせないほどに大変なことなのだ。……この宇宙は、単に星、月、遊星、花、草それに木だけでなく、ほかの人々からも成るものだが、その宇宙がこちらの存在の条件を作り出してもくれず、生きる余地も残してはくれなかった。そこで愛が門戸を広く開いてくれるのでなければ、他のいかなる力もこれを開くことはなかろうし、開くことはできない。それでもし、人間の愛に絶望したら――絶望しなかった者があろうか――残されたものは、神の愛だけだ。だが、神は――何年も前のあの時ですら、あのだだっ広い床の上で、不承々々、このことは感じていたが――白い神なのだ。また、神の愛がそれほど偉大であり、神がその子供となった人々をすべて愛してくれるというのなら、なぜわれわれ黒人は、これまで投げ捨てられたままなのか。なぜなのだ。その後いろいろと語りはしたが、その床の上では何の答も得られなかったのだ――少なくとも、その答だけは得られな

かった。そこで一晩中、わたしは床の上に倒れたままになっていた。わたしの頭上で聖徒たちは、わたしを「入信させ」ようとして、賛美歌をうたい、喜び合い、祈ってくれた。朝になって起こされた時、わたしは「救われた」ということだ<sup>(29)</sup>た。

ボールドウィンは入信後、3年間以上にわたって、高等学校に通いながら説教師をつとめたが、キリスト教会には人種の壁をつき破る愛が存在しないという致命的な事実をさとって、キリスト教会を見限る結果となる。また、ボールドウィン自身も、そのキリスト教信仰によっては、継父への憎しみを克服できないことを思い知らされた。しかしボールドウィンは、理性的に、頭ではキリスト教会を捨ててはいるものの、心情的にはキリスト教会を捨てきれず、「教会は、実に興奮にみちていた。この興奮からわたしが脱け出すには長い時を必要とした。そこで、この上なく盲目的な、はらわたの底のレベルでは、わたしは実際この興奮から脱け出してはいないし、また脱け出すことは決してない<sup>(30)</sup>」と書いている。そこでボールドウィンのキリスト教批判には、かつて愛した女性に対する未練といった趣があり、ボールドウィンが聖書の神は「白い」と言わざるを得ないところに、アメリカ黒人の複雑なキリスト教信仰の苦しさが集約的に表現されている。

従って、ここで切実に求められるものは、「白い」キリスト教、「白い」神学を根底的に批判し、これを克服し得る新しい聖書理解である。そして、その切実な求めに答えてくれたのが、ジェイムズ・H・コーン (James H. Cone) によって代表される「黒い神学」(“black theology”) である。〔ただし、単に「神は黒い」という、裏返されただけの人種主義的な主張であれば、決して目新しいものではなく、1910年代の後半から「アフリカへ帰れ」(“back to Africa”) と唱えて活躍した黒人民族主義者マーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey) も、黒い神と黒い天使という異教的な表象を強調<sup>(31)</sup>していたし、また1930年代に入ると、「白い」キリスト教に対する批判として起こった「黒い回教徒」(“the Nation of Islam”, 通称 “Black Muslims”) の運動が、対抗上「アラーの神は黒い」と称している<sup>(32)</sup>。さらに以上の動きとは別に、文学作品の上では、1920年代の詩人カウンティ・カレン (Countee Cullen) が「黒いキリスト」のイメージを追求している<sup>(33)</sup>。〕

ジェイムズ・H・コーンの「黒い神学」は、その画期的な著書『黒い神学とブラック・パワー』(*Black Theology and Black Power*) (1969年) と『解放の黒い神学』(*Black Theology of Liberation*) (1970年) において展開されている革命的な神学である。

コーンは、まず、1960年代の黒人解放闘争「ブラック・パワー」をキリストの福音の光に照らして評価し、黒人革命が神の心、キリストの御業<sup>みわざ</sup>であることを明らかにすることをもって「黒い神学」の課題であるとし、キリストにおける神の御業は人間を解放することにあつたとする基本的な聖書理解に立って、自由を求めるアメリカ黒人の闘いに同一化できないキリスト教はキリスト教ではない、と言い切っている。また、神がキリストにおいて一人の抑圧されたユダヤ人となり給うたように、アメリカにおいてはキリストは黒人でなければならない、とも言う。

キリストが黒い皮膚をまともされたということを示唆するのは、神学的な感情主義ではない。もし教会が受肉の継承体であるならば、もし教会とキリストが被抑圧者がいるところにいるのであるならば、キリストと教会は、人間が奴隷にされるという理由で共に苦しむことができるように、被抑圧者と全体的に同一化しなければならない。アメリカでは、黒人は、その黒さのために抑圧されている。だから解放は、キリストとその教会が黒人になることによるのみ実現されると思われ<sup>(34)</sup>。(大隅啓三氏訳)

だが、コーンの最初の著書は、黒人革命の気運の高まりの中で書かれていることもあって、「ブラック・パワー」をキリスト教と結びつけ、その正当性をキリスト教神学の立場から主張しようとする、やや性急な实际的目的が目立つように思われる。それに対して、第二の著書『解放の黒い神学』では、従来のキリスト教神学が故意か偶然か見落としてきた視点——被抑圧者の解放という視点に立つ見事な体系的神学が展開されている。そしてコーンは、その前書きに言う——

私の主張は、キリスト教は本質的に解放の宗教 (a religion of liberation) であるということである。神学の機能は、抑圧された社会のためにその解放の意味を分析し、そのことによって、政治的、社会的、経済的正義に対する彼らの闘いが、イエス・キリストの福音と一致するものであることを、彼らが知り得るようにすることである。社会における貧しい人々の解放に関係づけられない、いかなる使信もキリストの使信ではない。解放のテーマに無関心ないかなる神学もキリスト教神学ではない。

人々が「黒人である」がゆえに、抑圧されている社会においては、キリスト教神学は「黒人神学」(Black Theology) にならなければならない。……しかしながら、この黒人神学という理念に集約されている意味類型は、決してアメリカの

場面にのみ限定されるものではない、というのが私の信念である。なぜなら、黒人性 (blackness) は、いかなる社会にも見られる抑圧と解放を象徴しているからである。<sup>(35)</sup> (梶原寿氏訳)

あるいは、この「黒い神学」に対して、それは公平を欠き、普遍性をもたず、キリストをアメリカ黒人の独占物としている、とする反論があり得るかも知れない。しかし、差別と抑圧の行なわれている社会の中で、取税人と罪人たちの家に入って客となられたキリスト、また遊女の友となられたキリストが、いずれの側に立たれる御方であるかは自ら明かであり、キリストは万人のために死なれた、とする「普遍的」キリスト教神学が、常にキリスト教を差別と抑圧のイデオロギーとしてきた犯罪性が今こそ問われなければならない。コーンの「黒い神学」は、彼の「黒人性」——彼がまさにアメリカ社会における被抑圧者のひとりであるという、抜きさしならぬ状況の故に、改めてキリストの福音をその本質において捉えるものとなった。それは、なによりも、アメリカ黒人におけるキリスト教体験の深化を物語るものであろう。

なお、「黒い神学」の今後の課題として残されている問題は、何故アメリカ黒人が被抑圧者として苦しまなければならないか、という問いに神学的に答えることである。被抑圧者の解放こそ神の業である、とすることは、アメリカ黒人にとって神は白い差別主義者ではないと主張することではあるが、そもそもアメリカ黒人の抑圧という事実そのものが神の意図ではなかった、と言い切れない限り、決定的に神が白い差別主義者ではないことを立証した<sup>(36)</sup>ことにはならないからである。

つまり、この問題は、なにゆえ悪人が栄え、善人が苦しまなければならないか、というヨブ記以来の永遠の問題にも通ずるところがあり、アメリカ黒人におけるキリスト教体験は、今や、新しい神義論 (“theodicy”) を必要としていることになる。

## 注

1. Cf. Gayraud S. Wilmore, *Black Religion and Black Radicalism* p. 164.
2. 新聖書大辞典によれば、エジプトの詩的名称として用いられた「ハム」(詩篇 78: 51 ほか) は、おそらく「暑い」という意をあらわす語と関連がある、とされる。同辞典「ハム」の項を参照。
3. 同辞典、「クシ」および「ミツライム」の項を参照。
4. 聖パウロは、その手紙の中で、「各自は、主から賜わった分に応じ、また神に召されたままの状態にしたがって歩むべきである」として、「各自は、召されたままの状態にとどまっ

ているべきである。召されたとき奴隷であっても、それを気にしないがよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。主にあって召された奴隷は、主によって自由人とされた者であり、また、召された自由人は、キリストの奴隷なのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。人の奴隷となつてはいけない」と書いている。(1 コリント 7: 17-23)

5. Gayraud S. Wilmore, *Op. cit.* によれば、黒人奴隷に服従を説くために多用された聖句は、「僕たる者よ、キリストに従うように、恐れおののきつつ、真心をこめて、肉による主人に従いなさい」(エペソ 6: 5) であり、また、19 世紀の半ば頃までに、黒人奴隷用の教義問答集が数種類作られ、教義問答を通じて黒人奴隷は、農作物を育てるために神によって造られた人間であり、天の父と地上の主人に仕え、監督者に従い、盗みをはたらかないように、と教えられた。(Cf. p. 34)
6. この前後の記述は、主として、Gunnar Myrdal, *An American Dilemma*, E. F. Frazier, *The Negro in the United States* および *The Negro Church in America* に負うところが多い。
7. H. Richard Niebuhr, *The Social Sources of Denominationalism* p. 249. (Cited in James H. Cone, *Black Theology and Black Power*)
8. Cf. E. F. Frazier, *The Negro in the United States* p. 24.
9. Cf. Leon F. Litwack, *North of Slavery* p. 196.
10. Cf. Lawrence A. Jones, "They Sought a City: The Black Church and Churchmen in the Nineteenth Century" [C. Eric Lincoln (ed.), *The Black Experience in Religion* p. 9] ただし、ここで指摘しておかなければならないのは、1734 年頃から始まった "Great Awakening" の一局面として、礼拝の会衆の感情に強く訴える傾向をもつメソヂストおよびバプテストの各派が、黒人奴隷たちの心をつかむにある程度の成功をおさめている事実で、今日、アメリカ黒人キリスト教徒の間に両派の信徒が多数を占めているのはそのためである。
11. Cf. E. F. Frazier, *The Negro Church in America* pp 16-19.
12. たとえば、W. E. B. Du Bois, *The Negro Church* や Gayraud S. Wilmore, *Black Religion and Black Radicalism* は、この「黒人教会」を必ずしもキリスト教会と見るべきではないとし、また、この「黒人教会」を指導したのは主としてブーズー教のまじない師たちであったとする。一方、E. F. Frazier, *The Negro Church in America* は、明らかに、この「黒人教会」がアメリカの黒人教会の母胎の一つであったと見ている。
13. Gayraud S. Wilmore, *Op. cit.* p. 36.
14. Cf. *Ibid*, pp. 74-76.
15. Cf. *Ibid.*, pp 79-86.
16. Cf. Herbert Aptheker, *Nat Turner's Slave Rebellion* pp. 127-151.
17. Cf. *Ibid*, pp 137-138.
18. 黒人奴隷たちの間の「黒人教会」では、正規の按手札を受けていない説教者が活躍したが、これらの説教者は、聖書についての多少の知識と一種カリスマ的弁舌の才をそなえた黒人奴隷で、しばしば "exhorter" もしくは "jackleg preacher" などと呼ばれた。なお、Ralph

- Ellison, *Invisible Man* の中で, Marcus Garvey を思わせる過激な黒人民族主義者が Ras the Exhorter と名付けられているのは興味深い。
19. Cf. Benjamin E. Mays, *The Negro's God* pp. 30-39, E. F. Frazier, *The Negro Church in America* pp. 26-27, Gayraud S. Wilmore, *Black Religion and Black Radicalism* pp. 111-115. もっとも, バプテスト派は, その組織上, 各個教会の独立性が強く, 18 世紀の後半に, 黒人教会が白人教会から分離・独立する動きを見せ始め, 最初の黒人バプテスト教会のひとつ the Harrison Street Baptist Church (Petersburg, Virginia) が組織されたのは 1776 年のことであった。
  20. 以下の記述は, Benjamin E. Mays, *The Negro's God* によるところが多い。
  21. 詩篇 68: 31 は, 欽定訳の解釈に従えば, 「諸侯はエジプトよりきたり エテオピアはあわただしく神にむかひて手をのべん」(文語訳) また, 使徒行伝 17: 24-26 には, 「この世界と, その中にある万物とを造った神は, …また, ひとりの人から, あらゆる民族を造り出して, 地の全面に住まわせ, …」とある。
  22. たとえば, 1930 年代のシカゴの黒人地区では, 総計 500 ほどの黒人教会のうち, その 75 %が “storefront church” であった, と言われる。Cf. E. F. Frazier, *The Negro in the United States* p. 355.
  23. Cf. “The Dechristianization of Black Radicalism” (Gayraud S. Wilmore, *Op. cit.* pp. 226-261)
  24. ここで, この伝統を素材とした文学作品として Richard Wright の短篇 “Fire and Cloud” [短篇集 *Uncle Tom's Children* (1938 年) 中の一編] が思い出されるが, この作品は, 白人たちの暴力行為にも屈せず, デモ行進の先頭に立って黒人たちを飢えから救うことに成功する黒人牧師の物語である。なお, これは白人作家であるが, William Styron は, ナット・ターナーの反乱に取材して, 大作 *The Confessions of Nat Turner* (1967 年) を書いている。
  25. Cf. Gayraud S. Wilmore, *Op. cit.* p. 55.
  26. David Walker, “Appeal to the Coloured Citizens of the World” p. 45 (Cited in Benjamin E. Mays, *The Negro's God*)
  27. Frederick Douglass, *My Bondage and My Freedom* p. 215.
  28. James Baldwin, *The Fire Next Time* p. 29.
  29. *Ibid.*, pp. 44-45
  30. *Ibid.*, p. 47.
  31. Cf. Benjamin E. Mays, *Op. cit.* p. 185.
  32. Cf. James Baldwin, *Op. cit.* p. 60.
  33. Cf. Countee Cullen, “The Black Christ” (*On These I Stand* pp. 104-137)
  34. James H. Cone, *Black Theology and Black Power* p. 69.
  35. *Idem*: 『解放の神学』 pp. 6-7.
  36. 「黒い神学」に関する批判に関しては, Cf. William Jones, “A Question for Black Theology: Is God a White Racist?” [C. Eric Lincoln (ed.), *The Black Experience in Religion* pp. 138-153]